

令和8年6月4日

厚生常任委員会要求資料

福祉子どもみらい局

知的障害者の認知矯正による
行動変容に関する研究業務委託
報告書

～生物・心理・社会（BPS）モデルによる
「福祉の科学化」と当事者視点～

令和8年3月

株式会社薫化舎

研究報告書：知的障害者の認知矯正による

行動変容に関する基礎研究

～生物・心理・社会（BPS）モデルによる「福祉の科学化」と当事者視点～

1 序論

① 研究の背景

神経発達症（知的能力障害、自閉スペクトラム症など）を有する個人に対する心理アセスメントの結果からは、脳内における感覚情報処理過程に生得的あるいは後天的な偏りが存在することが示唆されている。弊社は、これらの感覚処理特性は、環境への適応困難、特異な行動様式、さらには社会生活における主観的な「生きづらさ」として表出すると考える。

このような認知特性を有する場合、曖昧または抽象的な事象の処理が著しく困難となる傾向が指摘されている。また、物事を二項対立的に捉えるいわゆる白黒思考や、認知的柔軟性の低さは、突発的な行動異常や自己防衛的な拒絶反応を誘発する主要なリスク要因となる。

従来福祉現場においては、これらの生活上の課題は「障害の重度化」あるいは「不可逆的な性格特性」として固定的に理解される傾向があった。しかし、感覚情報の入り口、とりわけ外界情報の約 80%を占めるとされる視覚入力に着目し、その入力特性を客観的に評価するとともに、無意識下に存在する認知の歪みを修正するアプローチを導入することで、従来の固定的理解を覆し得る可能性がある。

② 研究の目的

本研究は、株式会社薫化舎の特許技術である特性情報収集装置および方法（CRIS®システム）を用いて、対象者の [] を客観的に収集・分析する。

[] の [] での偏りや不全を把握し、[] を [] 光学デバイス（イエローゴーグル：以下、YG）を用いた介入を実施することで、対象者の認知の枠組み（Cognitive Frame：認知フレーム）を根本から再構築し、行動変容を促す可能性を確認する。

本研究は、知的能力障害のある人が抱える様々な困難の解決と豊かな暮らしの実現に向けた「福祉の科学化」を推進することを目的とする。

2 理論的枠組み：生物・心理・社会モデル(BPS モデル)

本研究は、対象者の行動及び状態を単一の要因によって説明するのではなく、生物・心理・社会の3つの次元が相互に作用する統合的なシステムとして捉えるBPS (Bio-Psycho-Social) モデルに基づき分析を行う。この枠組みは、健康状態や生活機能を多面的に理解する理論として、World Health Organization が提唱した International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) (国際生活機能分類) とともに理論的基盤を共有するものである。

本研究においてBPSモデルを採用する主な理由は、従来の行動療法や薬物療法といった単一領域の介入に依拠したアプローチの限界を補完し、客観的データに基づく多層的な支援評価、すなわち「福祉の科学化」を実現するためである。高齢化の進行に伴い、身体的・認知的課題が複合化する対象者に対しては、精神論的理解や「能力的限界」を前提とした主観的判断に依拠するのではなく、エビデンスに基づいた具体的かつ再現可能な支援方策を導出することが求められる。

この観点から本研究では、自傷行為、他害行為、パニックなどのいわゆる「問題行動」を、個人の「障害の重度化」や「不可逆的な性格特性」として固定的に理解する従来の枠組みから転換し、感覚入力の歪み、生理学的な不均衡、社会的な相互作用の不全といった多層的要因が相互作用する中で生じる「適応反応」として再定義することを試みる。

このような視点のパラダイムシフトは、対象者理解の精緻化を通じて支援の質を向上させるだけでなく、支援現場における職員の心理的負担の軽減やバーンアウトの予防等にも寄与する理論的基盤になると考えられる。

① 生物学的側面 (Biological)

特性が、および
に及ぼすな影響を評価する。具体的には、弊社の特許技術である特性情報収集装置 (CRIS®システム) 等を用い、対象者のにおけるやの状態を客観的に評価し、データとして取得する。さらに、
、すなわち
に加え、
、ならびに
を包括的に分析する。これらのととの関連を多面的に検討する。

② 心理的側面 (Psychological)

によって生じるが、情動

の不安定化、ワーキングメモリ機能の低下、および白黒思考に代表される認知の硬直化にどのように関与しているかを分析する。

また、対象者が示す「満足サイン (Content Signs)」と「苦痛サイン (Distress Signs)」を指標化するため、
等
を用いて を し、認知リフレーミング®による心理的安定化のプロセスを解明する。

③ 社会的側面 (Sociological)

対象者を取り巻く 及び対人的・組織的環境 () が、対象者の機能的マスキング (潜在能力の抑制) にどのように影響しているかを分析する。これにより、自傷行為や他害行為、パニック等の「問題行動」を個人の特性や責任に帰する従来理解から転換し、環境とのミスマッチから生じる相互作用の結果として再定義する。

④ 本研究における調査・測定体制

本研究では、対象者に関する客観的データの収集および適切なアセスメントを実施するため、専門的資格および関連領域の知見を有する複数の専門家によるチーム体制を構築している。調査および測定は、以下の専門資格を有する研究協力者によって実施された。

ア 認知リフレーミング士 (パートナー) :向井義、品川裕香、細井保宏、松井俊史、木下朋子

イ 公認心理師・臨床心理士: 細井保宏

ウ 運動専門家: 松井俊史

生理的評価として、 を測定した。具体的には、弊社の特許技術である特性情報収集装置 (イエローゴーグル: 以下 YG) の
を採用し、
を記録した。また、 及び について、
を用いて、
をスコア化した。さらに、 等の

課題を用いて [REDACTED] を評価し、これらの測定は運動専門家である松井が実施した。

心理的評価については、公認心理師・臨床心理士である細井が担当し、対象者の情動状態、認知特性、および行動指標に関する心理学的アセスメントを実施した。

さらに、特許技術を用いた視覚認知への介入および研究全体の分析については、向井を中心として5名の認知リフレーミング士（パートナー）が連携して実施した。これらの専門家は、対象者の [REDACTED] 特性の評価および認知リフレーミング®に関する介入プロセスの設計と分析を担当した。

以上のように、本研究では複数領域の専門家による分担と協働体制を構築し、BPSモデルに基づく分析に必要な実証データの収集と評価の信頼性及び客観性の確保を図った。

3 研究指定の対象者と方法

① クライアントのプロフィール

神奈川県立中井やまゆり園入所者3名（A氏、B氏、C氏）を指定された対象とした。

ア A氏

a 基本属性

[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]

b 認知特性とコミュニケーション様式・言語能力

[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]

c 行動指標（標的行動と課題）

[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]
[REDACTED]

d 行動変容の経過と環境介入・拘束からの脱却

[REDACTED]

れている。

f 観察される特性 矯正・変容の可能性

環境介入（YG 装用）によって、[redacted] や [redacted]
[redacted] 等、[redacted] かつ [redacted]
[redacted] への変容が確認された。

ウ C 氏

a 基本属性

[redacted]
[redacted]
[redacted]
[redacted]

b 認知特性とコミュニケーション様式・言語能力

[redacted]
[redacted]
[redacted]
[redacted]
[redacted]

c 行動指標（標的行動と課題）

[redacted]
[redacted]
[redacted]

d 行動変容の経過と環境介入・拘束からの脱却

[redacted]
[redacted]
[redacted]

e 研究上の考察ポイント

提供された D 医師の報告書によれば、[redacted] には [redacted] が認められ、[redacted]
[redacted] についても [redacted] が確認されている。また、運動機能の評価では、[redacted]
[redacted] であるなど、[redacted] が顕著に観察された。

f 観察される特性 矯正・変容の可能性

[redacted] が成立する。YG の装用により、[redacted]
が安定し、[redacted] が向上するなど、[redacted] が [redacted]
[redacted] へ直結する可能性が高い。

② 実施プロセス(OSAC サイクル)

以下の4段階の循環的プロセス（OSAC）を通じてデータを収集・分析した。
ア 観察（Observation）

自然な状態での[]の観察を行った。

イ 調査（Survey）

本研究では、提供された[]データに加え、CRIS®による視覚認知特性検査を実施した。評価指標として、[]及び「[]」に関する評価については[]を用いて行った。[]については「[]」を用い、[]の評価には[]を用いて指標化した。また、[]と[]の評価については[]等を用いて行った。

さらに、[]検査、[]検査及び詳細な[]測定（[]等）を実施し、対象者の身体機能および生理学的状態を多面的に評価した。

ウ 分析（Analysis）

収集した多次元データをBPSモデルに基づき統合し、因果関係を解明した。

エ 作成（Creation）

個別化された認知リフレーミング®計画および多角的な支援プロトコルの策定を行った。

前項までに述べたデータの収集および分析に加え、現場においてもこれらの測定をいかに精度高く実施したかという「測定の妥当性と調査プロセス」も、本研究における重要なエビデンスの基盤となる。

本研究では、対象者の特性に十分配慮しつつ、データの客観性と再現性を担保するため、以下の厳密な段階的フローに基づいて調査及び測定を実施した。

① ディストラクション（注意散漫）の排除と段階的アプローチ

対象者の自然な状態を把握するため、調査はまず[]における[]から開始した。具体的には、[]、[]、[]、[]などを観察し、日常的な行動様式を把握した。

その後、対象者を会議室へ個別に案内し、[]を最小化した環境を整えたうえで個別評価を実施した。評価内容には、[]、[]、[]、[]、ならびにYG着用下での[]などが含まれる。なお、行動状態は時間帯によって変化する可能性があるため、本研究では[]も考慮した評価を行った。

② 環境測定の並行実施

個別評価と並行して、対象者の[]や[]におけ

る [] の測定を実施した。 [] を用いて [] を解析し、 [] で [] を測定した。特に、施設内の [] も対象とし、 [] が対象者の [] を客観的に評価した。

③ ビデオ収録に基づく客観的記録の確保

現場での観察における主観的判断や評価者の先入観による影響を最小化するため、本研究では [] をビデオ収録した。

収録されたデータは [] し、複数の評価者による再評価を通じて、対象者の行動（ [] ）に関する解釈の共有を図った。

以上のように、本研究では単なるアンケート調査や聞き取り調査に依拠するのではなく、統制された観察手順、専門的測定機器による環境計測、さらに映像記録に基づく事後検証プロセスを組み合わせることで、データ収集および評価の客観性と信頼性の確保を図っている。

4 観察・調査結果(Observation & Survey)

① [] アセスメント([]、 []、 []、 [] の測定値)

本研究では、対象者を取り巻く [] のうち、特に [] を把握するため、 [] の測定を実施した。測定項目として、 []、 []、 []、 [] を対象とし、 [] および [] を用いて客観的データを取得した。

ア [] の測定項目と評価目的

本研究では、単なる [] にとどまらず、 [] が対象者の [] を評価することを目的として、 [] および [] を用いて以下の項目を測定した。

a []:

[] を示す指標として [] を測定した。評価の目的は、 [] と [] となり、 [] あるいは [] のトリガーとなっていないかを検討することである。

b [] および []

[] および [] を測定した。特に、 [] においてしばしば観察される [] が、

し、
や
していないかを評価することを目的とした。

c
を示す指標として
を測定した。
ため、これが対象者の
の要因となっていないかを検討した。

イ
の結果、施設内の
において、対象者の生理的及び行動的反応に影響を及ぼす可能性のある要因が確認された。主な所見は以下の通りである。

a
し、対象者にとって過剰な刺激となる可能性が認められた。このような環境条件下では、
が生じる。対象者にもそういった傾向が観察された。

A氏は
が確認され、B氏及びC氏では
が観察された。

b
と
施設内の
可能性が示唆された。このような
は、対象者に
に影響を及ぼす可能性がある。

c
:
一部の空間では
が確認され、
により、
可能性が示唆された。これらの要因は、対象者にとって
一因となる可能性がある。

ウ 生活環境データ

本施設の測定データを客観的に評価するため、

本研究における極めて重要な発見として、YG（以下、YG）装用と [REDACTED] が確認された。

a B氏

YG を装用させた [REDACTED] 観測された
(例: [REDACTED] YG を [REDACTED]
[REDACTED])

b C氏

検査開始時に [REDACTED] が、YG を装用して [REDACTED]
[REDACTED] する傾向が見
られた。

【 [REDACTED] (YG 装用) に伴う [REDACTED] の具体的推移表】

[B 氏の [REDACTED] ([REDACTED])]

YG を装用した [REDACTED] され、 [REDACTED] した。
逆に YG を [REDACTED] が明確に記録された。

C 氏の [REDACTED] グラフ ([REDACTED])

[REDACTED] 時] [REDACTED] 時]

[REDACTED] 時] [REDACTED] 時]

検査項目	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]

検査場面

[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]
[REDACTED]	[REDACTED]	[REDACTED]

エ

a A氏

では を示したが、YG 装用下では へと改善した。

b B氏

時、YG 装用 を示し、 ポジティブな反応を示した。

c C氏

と答えるが、YG 装用時は が見られ、比較質問に対して「YGの方が」に基づく回答を行った。

③ 行動・相互作用観察()、職員の動き、動線分析)

の対象者の が顕著である。A氏には 認められ、C氏は であるなど、 が示唆される状況である。しかし、A氏及びB氏は が提供されており、両名とも の傾向が観察された。一方、C氏には主として が提供されている。

また、職員配置にも環境構造上の課題が認められる。当該空間では職員の動線がテーブルや通路に沿った直線的な動線となっており、職員が一列状に移動せざるを得ない構造となっている。このような動線構造では、職員が1人の利用者の介助に入った場合、背後や視覚にいる他の利用者の状況を同時に把握することが物理的に難しくなる。チームとしての安全配慮は行われているものの、とりわけ前述した といった窒息等の重大リスクを伴う行動については、発見や介入が遅れる可能性がある。結果として、このような環境構造は実質的に単独対応(ワンオペレーション)に近い状況を生みやすく、利用者への細やかな観察を困難にするとともに、現場職員の安全管理に対する心理的負担を増大させる要因となり得る。

さらに、B氏が 状況や、C氏にみられる は、過去の施設環境において活動機会が十分に提供されなかった生活様式の影響を受けた、いわゆる の残存痕跡と考えられる。

④ 観察

検査において、3名とも YG 装用時において
が確認された。

特に C 氏は、
が、YG 装用時は
ことができた。

加えて、A 氏は
を行っているこ
とが認められた。

⑤ テスト

ア A 氏

では
が、YG 装用時は
した。

イ B 氏

では
を示したが、YG 装用後は
を見せた。YG を外すと、
した。

ウ C 氏

では
が、YG 装用時は
と明確に回答した。

⑥ 数的把握テスト

のテストを実施
した。B 氏は YG 装用下で
が生まれ
が見られた。C 氏は
であったが、
を示した。

5 多角的分析

① 生物学的要因の統合 ()

B 氏に観測された YG 装用
と、C 氏に
見られた
は、一見相反するよう見えるが、
を示
唆している。

は、
において「
」
として知覚される。

A 氏や B 氏のように
しているケースでは、
、C 氏のように
のケースでは、

していると考えられる。
YG 装用によって された 。これにより、B 氏の
、C 氏の
可能性が高い。 は、
であることを示している。

② 心理・知覚的要因の統合（自己防衛から主体性の回復へ）

視覚的な情報過多は、脳のワーキングメモリを圧迫する。B 氏の「
や「
」、A 氏の「
」、C 氏の「
」は、
と解することができる。

しかし、YG 装用によって されると
、ワーキングメモリが解放される。B 氏は
し、A 氏は、C 氏は する等、
した。

B 氏の「
」や C 氏の「
」
は、
ことの明確なサインといえる。

③ 社会・環境的要因の統合（学習性無力感と機能的マスキング）

施設内の
や閉鎖的な環境は、利用者の脳に慢性的な不安を強い
ている。加えて、
といった支援者側の過保護や諦め（認知バイアス）が存在する。

C 氏が
背景にも、日中の適切な活動機会の剥奪が影響
している。これらの環境要因と支援側の過少評価（機能的マスキング）こそが、
彼らが本来持つ社会性や学習能力（C 氏や B 氏に見られた
など）の表
出を抑圧している最大の社会学的要因である。

6 支援プロトコルの策定(Creation)

① 個別化された認知リフレーミング計画（個別支援計画へのベースシステム）

支援者による対象者理解について、
、
、
等といった行動課題を、「不可逆的な障害特性や性格」として捉える
のではなく、「
に対する一時的な処理不全（SOS サイン）」として再
解釈するリフレーミングを行う。

また評価指標（
等）を用い、「苦痛サイン」が出現した際は、直ちに

行動を制止するのではなく、環境側の [] を取り除くアプローチへと支援方法を転換する。

② 環境調整プロトコル（ [] 改善、 [] 時の工夫、職員の動線配慮等）

ア [] と [] の調整

3名全員に [] の回復や [] の安定化をもたらしたデバイス（コーンロッドグラス®）の装用を提供し、ダイルーム等での滞在時や学習課題の際に日常的に実装する。施設 [] の導入も急務である。

イ [] ・ [] 環境の改善

事前調査および当日の行動観察等のデータから、対象者の [] が確認された。具体的には、中井やまゆり園で実施された [] の結果によれば、A氏には [] が認められ、 [] に観察された [] からも、 [] 可能性が示唆される。C氏は [] 状態にある。B氏については [] にもかかわらず、 [] している状況が観察された。

これらの実態を踏まえ、誤嚥や窒息といった重大なリスク、および [] への見直しを徹底する必要がある。

さらに、利用者が「ここは [] を行う場所である」と [] かつ直感的に理解できるよう、 [] に集中できる落ち着いた空間の構造化を行う。空間の構造化とは、 [] 支援手法である。本施設の [] は [] にあり、これが [] や [] の誘因となっている可能性がある。そのため、 [] 、 [] 、職員動線の見直し等を含め、利用者が心理的に安心して [] に集中できる環境の整備を行う。

ウ [] と [] からの脱却

B氏を [] ことや、C氏に [] 状態を改め、デバイス（コーンロッドグラス®）を装用して [] を取り除いた状態で、他者と共に活動する「観察学習（モデリング）」を組み込んだ小集団プログラム（ワークショップ・プログラムやリサイクル活動等の役割付与）を提供する。

③ 個別の支援計画への反映

3名の対象者すべてにおいて、YG装用下では運動制御能力の向上を示唆する

所見が確認された。具体的には、[REDACTED]、[REDACTED]、[REDACTED]など、[REDACTED]が観察された。

これらの結果を踏まえ、過去の過度な安全優先による管理や、長期間にわたり運動機会が制限・剥奪されてきた状態からの脱却を図る必要がある。そのため、理学療法士等の専門職の介入のもと、安全な環境下においてスモールステップで進める粗大運動機能の再獲得プログラム（歩行能力の向上、バランス訓練等）を、個別支援計画の重要な基盤の一つとして位置づける。

これは単に運動機能の向上のみを目的とするものではない。自発的かつ安定した身体運動の回復は、[REDACTED]や[REDACTED]といった生物的要因を整えるとともに、「自分にもできる」という自己効力感の回復という心理的要因の改善にも寄与する。こうした生物的・心理的な安定が基盤となることで、他者との交流や新たな日中活動への主体的参加といった社会的要因が促進され、結果としてBPSモデルに基づく統合的なQOLの向上へとつながると考えられる。

7 結論

「福祉の科学化」がもたらす当事者のQOL向上と今後の課題

本研究は、知的能力障害のある人の「生きづらさ」や「問題行動」が、個人の不可逆的な内的要因のみに起因するものではなく、[REDACTED]と[REDACTED]・社会的環境との間に生じる致命的なミスマッチ、すなわち二次的障害として生起している可能性を、CRIS®システム等による客観的データに基づき仮説として提示するものである。

特に、[REDACTED]が、[REDACTED] [REDACTED]すだけでなく、B氏およびC氏に観察された[REDACTED] [REDACTED]を引き起こす[REDACTED] [REDACTED]トリガーとして機能している可能性が示唆された。

BPSモデルを用いたこの「福祉の科学化」のアプローチは、支援者側に存在しがちな固定化された認知バイアス（「どうせできない」などといった思い込み）を問い直し、当事者が本来有している人間的尊厳と潜在能力（主体的なコミュニケーション能力、学習能力、運動能力等）の回復を促すパラダイムシフトとなり得るものである。

また、従来 of EBP (Evidence-Based Practice) の枠組みを踏まえつつ、N-of-1 研究の視点から、個々の当事者に最適化された支援プログラムとして個別支援計画の中に導入可能である点も重要である。本調査においても、中井やまゆり園が従来から蓄積してきた多様なデータ資源を最大限に活用し、その分析結果を報告している。

中井やまゆり園は、従来から豊富な支援プログラムおよび実践データを有しており、これらを今回のようなマルチモーダルな視点から再評価することで、「福祉の科学化」、「当事者視点に立脚した N-of-1 アプローチ」、そして「ともいき社会」における利用者・支援者・地域社会の関係性の強化につながる可能性が示唆された。

今後の課題としては、今回特定された介入プロトコルを一時的な検査環境にとどめるのではなく、日常的な生活空間および組織的な支援体制の中へいかにシームレスに実装し、当事者の継続的な QOL 向上へと結びつけていくかである。こうした取り組みは、福祉現場における支援の個別最適化と「福祉の科学化」をさらに推進する重要な契機となる可能性がある。

(別添参考データ) 対象者の生活空間の

データ項目の凡例 (見方)

本データは、施設内のが利用者の生理的・心理的状态にどのような影響を与えているかを客観的に評価するための測定結果である。各数値・グラフの意味は以下の通り。

基本数値

: を示す。一般的な程度が推奨されます。 を超える環境は、 となる可能性がある。

: を示す。数値が低い () になり、数値が高い () と になる。

: を示す指標。 が最低基準ですが、 が求められる。

各種グラフ

: を示すグラフ (左の青から右の赤へ)。

: を示すバーグラフ。特に と、 する。

■■■■■: ■■■■■を国際基準で図示した専門的指標。

参考)

主な個所の■■■■■を添付する(別添資料には測定全データを添付)

① ■■■■

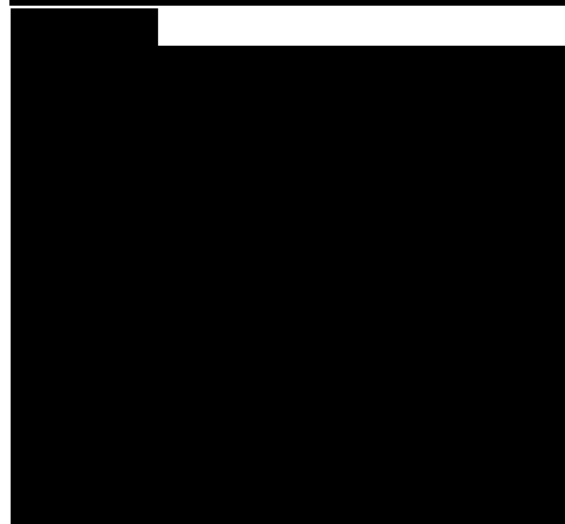
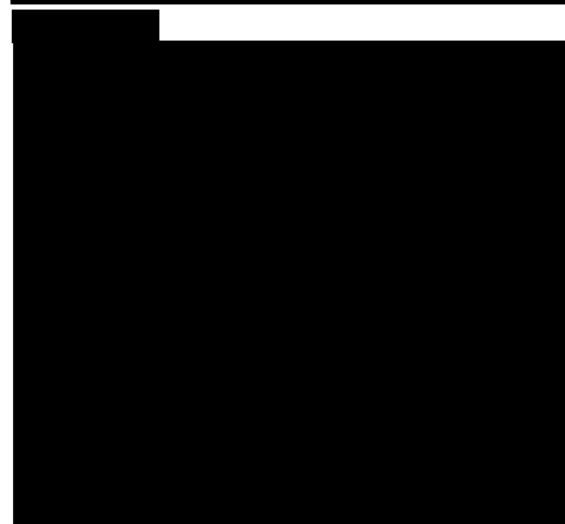
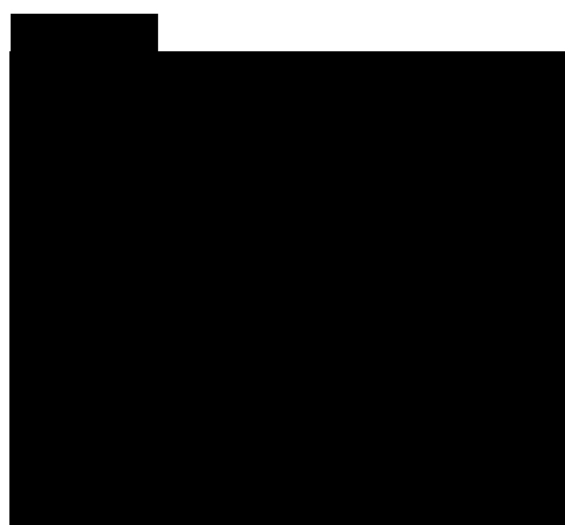
やまゆり園260212午前巡回計測データ（本体計測分全部）

📍 028 🕒 2026/02/12 11:30



Aさん指定席

[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]



② 寮 [Redacted]

やまゆり園260212午前巡回計測データ（本体計測分全部）

📍 026 🕒 2026/02/12 11:30

[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]

寮 [Redacted] Aさん指定席



③ 寮 [Redacted]

やまゆり園260212午前巡回計測データ（本体計測分全部）

📍 035 🕒 2026/02/12 11:30

[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]
[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]	[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

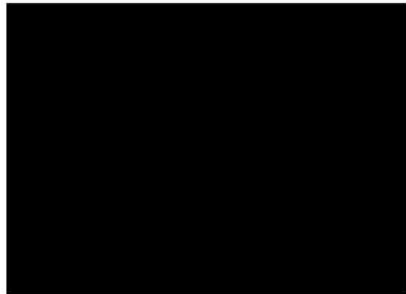
[Redacted]

[Redacted]

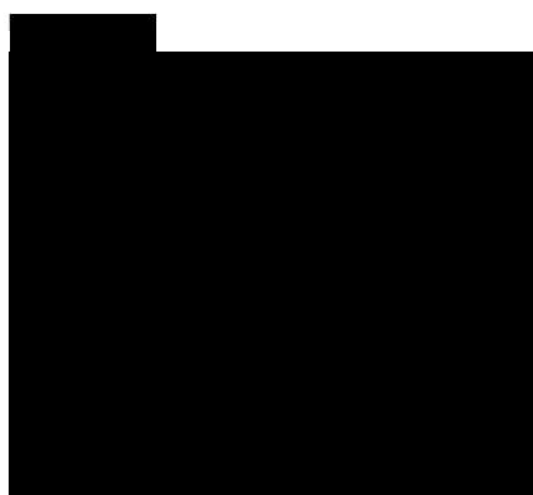
④ [Redacted]

やまゆり園260212午前巡回計測データ (本体計測分全部)

034 2026/02/12 11:30




寮



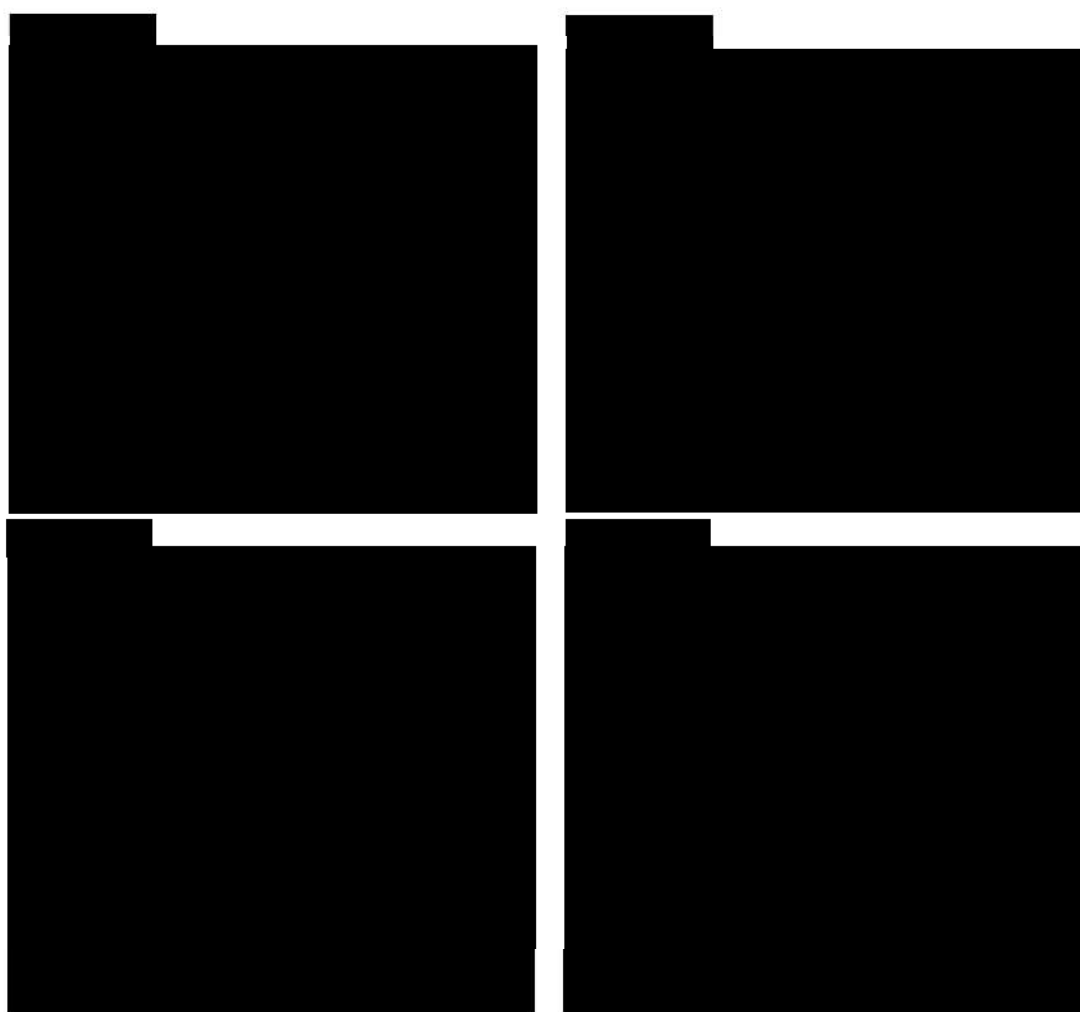
⑤ 寮

やまゆり園260212午前巡回計測データ（本体計測分全部）

📍 024 🕒 2026/02/12 11:30



原



⑥ 中井やまゆり園主要箇所

やまゆり園260212午前巡回計測データ（本体計測分全部）



No	測定日時	メモ
001	2026/02/12 11:30	■■■■ Aさん指定席 ■■■■
002	2026/02/12 11:30	■■■■ Aさん指定席 ■■■■
003	2026/02/12 11:30	■■■■ 部屋 ■■■■
004	2026/02/12 11:30	■■■■ 部屋 ■■■■
005	2026/02/12 11:30	■■■■ 部屋 ■■■■
006	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
007	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
008	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
009	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
010	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
011	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
012	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
013	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
014	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
015	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
016	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
017	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
018	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
019	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
020	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
021	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
022	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
023	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
024	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
025	2026/02/12 11:30	■■■■ Bさん自室
026	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■ Aさん指定席
027	2026/02/12 11:30	■■■■ Aさん自室
028	2026/02/12 11:30	■■■■ Aさん指定席
029	2026/02/12 11:30	■■■■ Bさん指定席
030	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
031	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
032	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
033	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
034	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
035	2026/02/12 11:30	■■■■ ■■■■
036	2026/02/12 11:31	■■■■ ■■■■
037	2026/02/12 11:31	■■■■ ■■■■
038	2026/02/12 11:31	■■■■ ■■■■
039	2026/02/12 11:31	■■■■ Cさん自室 ■■■■
040	2026/02/12 11:31	■■■■ Cさん自室 ■■■■